むらきみあずまびと
村君東人　篇

村君東人、銅鐸を発見する

銅鐸は、弥生時代に農耕祭祀のときに使われたと考えられています。これまでに約５００点の銅鐸が発見されており、振子（舌）とセットとなって出土しているものがあります。このことから、銅鐸の内側に振子を吊して鳴らした「ベル」だったと推定されています。弥生時代の前半は小さな銅鐸でしたが、後半ともなると１ｍ前後の大きなものへと変わっていきました。音を鳴らす銅鐸から見る銅鐸へと変化していったのです。

このような銅鐸ですが、ここ宇陀でも発見されています。時はかなり遡り、奈良時代のこととなります。『日本書紀』の次につくられた平安時代初期の歴史書、『続日本紀』には、和銅６年（７１３年）に銅鐸発見のことが記録されています。この文献ではじめて「銅鐸」という名称が使われ、以降、その名称が定着しました。

『続日本紀』によると、宇陀郡の波坂郷の住人（役人）で、大初位上という位をもった村君東人が長岡野という所で銅鐸を発見し、朝廷に献上したとあります。この銅鐸の高さは約 90 ㎝、口径は約 30 ㎝。その形は変わっており、叩くと良い音がしたようです。

奈良時代の出来事であったため、残念ながらこの銅鐸は現存していませんが、大きな銅鐸が「波坂郷長岡野」の山中に埋められていたのでしょう。銅鐸発見の場所については、諸説があり詳しいことはわかっていません。村君東人は、銅鐸を発見したからこそ、日本の歴史にその名を残すこととなりました。